



詞藻

眞の生命

松 木 秀 月

七重八重花は咲けども山吹きの

實の一つだに無きうかぢしき

如何に花が美麗であつても、それに實が無ければ駄目である。それと同様、如何に巧言令色を並べ、山とあす文書を積むだところで、其の根抵が確定し徹底して居あかつたなら、根無し草の波上に浮べると同様あるものである。そんな物より、寧ろ花や見るに足らず、言や巧あらずと雖も、それに實あり、確たる根抵のあるものを撰ばねばならぬ。それと同じく、宗教の中でも、如何に立派な理想を説いた所で、それが徹底せず、唯理論にのみ走つて現實を無視したものであつたなら、

有花無果の批評を免れ得ないのである。總て宗教の世の中に用ひられると否とは、其の教が能く吾人の理想を統御し、而して吾人生活の要素たり得ると否とにある。故に、如何に深遠ある教理を説いたとて、現實に没交渉なるものであつたなら、それは空理空想になつてしまふ。そんな宗教は現代に必要あるものであらねばならぬ。故に佛教の中に於いても、釋尊が五十年の長日月に亘り、八万四千の教法を説いてあるが、其の中に自ら、吾人の取つて以つて範とすべきものと、然らざるものとあるは今更言を俟たないが、彼の數ある教法、五十年の長きに亘る說法も、歸する處、佛知見に開示悟入せしむると云ふにあつたのである。佛知見とは、本來本具の知見、即ち眞の生命と云ふ事である。故に佛知見に開示悟入すると云ふ事は、……四門、四智、四位、觀心、等に約して説明すべきであるが今煩を略す……眞實の生命を開顯し獲得すると云ふ事にある。如何に巧なる龍を畫いた所で、其の龍に睛を點じない間は其の龍には生

氣は無い。死んで居るのである如く、佛陀が如何に澤山を經論を説いた所で、所化の機に、眼を得させなかつたなら、其の機根は遂に永遠に死んだ者同然、丁度あやつり人形の如きで居らねばならぬ。故に佛陀は我々の盲ひたる智眼を開發して、明かある智眼を顯示し、而して妙法の果海に悟入せしめたのである。是れ方便品の『欲令衆生開佛知見使得清淨故出現於世、乃至是爲諸佛唯以一大事因緣故出現於世』の所説ある所以である。

乍然方便品に於て、斯くの如き所説があるからと云ふて、所化の機が此の品に於て直ちに得益ありとは云へぬ。…一往與釋の時はありとするが…即ち方便品の時には未だ眞の佛知見は顯示されなかつた。従つて妙法果海に悟入する事は出來なかつたのである。それは迹門に於ては理論的には一念三千と云ふ様な義も顯はれて居る、けれどもそれは單に理論としてのみであつて、實際的のものでは無い。故に迹門當分にあつては、眞實の得益は無かつたのである。

宗祖が『日蓮は第三の法門なり』と仰せられた師弟の遠近は勿論、前の二教相と雖も、本門に至らねば徹底的に顯はれて居らぬ。是れ『本門未顯以前尙以迹門名爲虛』と仰せられ又『未得道教覆藏教』『去曆昨食』と宗祖の破を蒙る所以である。是が本門壽量品に至り『然我實成佛以來甚大久遠壽命無量云々』と佛陀の御壽命の顯はれると同時に衆生の生命も確定したのである。灌頂抄に、

此品ノ肝要ト者明ニ釋尊ノ無作三身ヲ欲レ令増ニ進弟子ノ三身ヲ今ノ疏ニ云ク今正ニ詮ニ量ス本地三佛ノ功德ヲ文乃至此ノ三身雖ニ無始本覺ナリト且ク立ニ三五百塵劫ノ成佛ヲ此ノ時始覺ノ三身即三世常住ノ今ノ弟子始覺ノ三身亦如レ我カ顯ノ可レ成ニ三世常住無作ヲ也云々  
と、又御義口傳に云く、

當品ノ意我ト者法界ノ衆生ナリ十界ノ己々指我ト云フ也無作三身ト定ニ此ヲ實ト云也成ト者能成所成ナリ成開ノ義ナリ法界無作三身ノ佛ナリト開ナリ也佛ト者此ヲ覺知スルヲ云也已トハ者過去ナリ來ト者未來ナリ己來ノ言中ニ現在ハ有也云々

と、如是壽量の實事は爾前迹門にあし、能化の實事顯はれず、況んや所化をや。故に壽量品は吾人にとつて無くてはならぬ經にてあるなり。

是れより以前の諸經に於いては、理体法身の無始無終は說かれて居るが、俱体俱用の三身相即の佛身の無始無終は顯はれて居らぬ。故に畢竟唯理論の經であつて、事實に生きた教法では無い、既に台家に於ても新成に顯本を許さぬ、新成に顯本を許されねば吾人は眞の成佛は出來ぬ勘定である。其の外密家に於て威張る大日如來でも但法身であつて三身相即の佛で無い。況んや餘の宗々に於て論ずる常住は、皆諸經の常談たる但理法身常住であるのである。

上述の如くなる故に、眞の生命を開顯し、妙法果海に歸入し得るの教法は、上行所傳唯本一部の法花經より他は無いのである。此の妙法末法に廣宣流布して、順縁の機…本已有善…は是れを見聞して直ちに自覺の大道に入り、逆縁の機…本未有善…は因倒因起の大益を受けて未來成佛の種子を

結ぶを得るのである、如是唯本一部の法華經は在世に脱益を與へ末法には下種の要法妙法五字として下種益を與ふ…是れ正意也、在世の種益末法の脱益と俱に傍意也…在滅俱に信謗二縁の擇び無く益を得るの經唯今經に限る。

若し夫れ吾人が此の世の中に生れて來て、而も眞の自己を覺知せずして死んだなら、隨分あはれ者では無からふ歟。是を無意味ある一生無意義なる人生と斯う云ふのである、故に吾人にして意義ある人生を送らんと欲するなら、先づ此の本化の大法に依つて以つて眞の自己を覺知せねばならぬ。而して吾人が此の妙法の功能に依つて、壽量所顯の無始の古佛に一如し、常寂光土を此の現實界に建設し、本時の風光に浴して自受法樂の果を得るの時、即ち始めて吾人の眞の生命は顯現するのである。此の自覺を得眞の生命を獲得せし人にして始めて意義ある人生を送り、有意味の生活に住するを得るのである。